

日本人権史上の婦人像

— 佐藤機恵子の場合 —

高 道 基

は し が き

殖産興業、富国強兵のスローガンによって始められた明治の日本には、大きな暗黒の部分があった。「娼妓」の社会的存在もその一つである。近代日本の支配構造の確立の中で、彼女たちの負わされた暗黒の意味は苛烈であった。そのことを明らかにすることは、解放のための戦いを含めて、日本近代化の体質構造を究めることである。

時代と状況の推移につれて、明治日本の姿は益々弁じ難くなってゆく。人権史上のかつての戦いの鮮烈な記憶も人々の脳裏から次第に薄れつつある。けれども我々は今、人権という言葉のどっしりとした定着の中に住んでいるだろうか。

娼妓解放の戦いのもつ意味は今日も不滅である。その解放を文字通り血戦として戦った日本救世軍の運動の意味も不朽であろう。この稿はしかしその意味の解明のために起こされたものではない。先ごろたまたま依囑により、日本救世軍の父「山室軍平」を執筆しながら、その折にうけたその妻機恵子への感銘をもとにして組み立てられたものである。

日本プロテスタンチズムの初期の担い手たちが、殆ど例外なく封建社会の知的エリートとしての士族層又は豪農の出身者であったこと、そのことについては彼らの限界を含めてすでに多角的に検討されつくしたようである。しかし何でもないことのようにあるが、その配遇者の出身階層乃至はその基体的素養に向けられた論評は見当らない。詳細な分析はここでできないが、日本近代の開幕期に、キリスト教の臓する価値を、内に向かって触発しえた彼女たちも亦、多く

士族層又は豪農層の出身者である。そうであったとすれば、彼女たちの士魂は、どのように夫たちの事業を支えたのだろうか。

ここでいう佐藤機恵子は、豪農の娘であった。夫山室軍平は对象的に「貧農」の出身であり、そこに士族出身者と全く異った彼の彼の平民伝道の志の明確な定立が見られる。機恵子はその夫の志を助け、自らも平民の友としての生涯を貫いた。その点、彼女の夫への献身、夫の妻への感謝の中には、なみなみでない深い人格的な交情が秘められている。しかし、病軀をおして戦いの中にその生涯をおわった機恵子の臨終の言葉は、「私はその初め、救世軍に投じた精神は、武士道をもってキリスト教を受け入れ、之を以て世に尽さんとするにありました。此の事を民子、武甫らにも伝えて下さい。」であったという。

(1)

機恵子は明治七年十二月五日、陸中花巻（宮崎県）の出生。養蚕を生業とする父佐藤庄五郎、母安子の長女である。開明的な素封家の家に育ち、早くより向学の志篤く、十八才の折巖本善治設立の明治女学校に入学、在学中より植村正久の一番町教会に出席し明治二十四年、彼の手から洗礼を受領、明治二十六年、明治女学校普通科を修業、さらに高等文科に進み、二十八年に卒業している。山室の「機恵子伝」によれば彼女は深く武道をたしなみ、柳生心眼流薙刀の初段の免許をうけたという。在学中は殊に数理科学の才に恵まれ、社会学、心理学の研究に志し、カーライルの「英雄崇拜論」を座右に置くなど当代の女傑ぶりを思わせる新婦人であった。

巖本の明治女学校の持つ意味は大きい。彼女在学中の教師の中には、英文学者戸川秋骨、馬場孤蝶、そして若き日の鳥崎藤村がいた。巖本はこの女学校をキリスト教主義をもって運営し、かたわら「女学雑誌」を発行、女子の人権拡張を強く標榜して立った。その訓陶をうけたことは彼女の青春のもっとも光彩ある部分であろう。

明治女学校卒業ののちは「大日本婦人教育界」の設立にかかる女紅場の教壇に立ち、かたわら「女学雑誌」の事務をとって自ら生計を支えている。「婦人矯風会」書記の経歴もある。

機恵子と救世軍の接触は、明治二十八年その日本到着の当初に遡る。ロンドンに本部をおき、ウィリアム・ブースを総師とする救世軍の日本開戦は、一八八九年七月のロンドンにおける結団式と同年九月、司令官ライトを先頭に七名の隊員の横浜到着によつてはじまる。彼らは速やかな日本への土着をはかるため、紋付、羽織、袴を着用、コルネット、タンバリンを携えた新奇な大衆伝道方式と共に、人々の好奇心をさそつたという。平民伝道の志にもえて東京にあり職工義勇会の伊藤為吉に身を寄せていた山室軍平は、彼らの大衆への熱情に感じ、開戦間もなく初の日本人士官としてここに投じた。機恵子は英国人婦人士官が日本風に慣れずに演ずる不作法を見兼ね、進んで自ら行儀作法を教授した。こうした義侠は彼女の持ち前であつた。こうして彼女は山室と出会つた。山室と機恵子との接近は、山室が明治三十一年皇太后逝去の諒闇中「放歌」のかどによつて逮捕され、機恵子がこれに同情を示すなどのことがあり互いに相惹かれるものがあつたのだろう。明治三十一年五月、機恵子に、山室が送つた書簡がある。機恵子が救世軍への接近の故に女紅場内で讒に会い、苦しんでいたところに、これを慰藉するために書かれたものと思える。

…大将ブースは言う。改革者が通過せねばならぬ境遇三つあり。曰く讒謗、曰く迫害、曰く勝利と。熟したる果実は鳥にいばまるる如く、正人は必ず小人の讒誣に遭はざる可らざる筈に候。区々の誣謗位は之に打勝ちて十分正義の勢力を彼の学校内に扶植し給うこと、誠に今日の急務に無之候や。即ち斯る際故、例へば今年中でも君が尚続けて彼の学校を教へ、つまり地位を棄てるをも厭わぬ覚悟にて、十分主張を立てとおし、而して復機を見て潔く職を辞し給はば学校に対し、又知己朋友に対し、立派なる辞職の仕方にて無之候や。どうせ我輩の生涯は戦争の生涯に候。唯戦争の反面には、暗黒、困難、不快のわだかまると同時に、他の半面には、勝利、光明、安心の充足する故に、以て慰むることを得る儀と存知候。どうか来りて尚も義戦を戦い続けられ度候。

僕はこの度の事が、君の生涯に最も貴重なる、即ち道の為に讒誣誹謗に堪ゆる性情を、鍛錬すべき好機会にはあ

らずやと愚考致候：三月二十七日（日曜）^{（注1）}

こののち、山室は婚約を申し出、機恵子はこの申し出に「君ならで、誰にか見せん、梅の花、色をも香をも、知る人ぞ知る」という古歌で承諾をあたえている。海軍士官を兄に持つ彼女は、そのころ麴町下六番町に、松本萩江と同居して、陸海軍々人慰藉事業にもあたっていた。

結婚の日取りは明治三十二年六月六日、九段坂のメソジスト教会堂で行なわれている。会衆二百五十名、山室軍平には機恵子の学友松本萩江が付き添い、機恵子は巖本善治に導かれて司式者ブロード（救世軍書記官）の左右に着席、ブロードの聖書及び「結婚の約束」朗読、誓約、宣言あり、のち山室は立って、(一)自らの救、(二)救世軍にあること、(三)戦争の伴侶のあたえられることを感謝、救世軍の進撃に理解と同情を求めて着席した。式中挨拶に立ったものに伊藤為吉、山室の同志社における先輩留岡幸助、片山潜^{（注2）}、婦人矯風会潮田千勢子の諸子があった。招かれて列席していた久布白落実は、その折の清新な印象を想起して次ぎのように書いている。

機恵子婦人と御結婚の時、私は女子学院の学生だった。今日は山室軍平という人が佐藤機恵子と九段教会堂で結婚式を挙げるという。花婿も花嫁も二人とも講壇の両側に立ち、挙式後二人とも説教した。偉いものだと驚いた。

其の後で矢島拇子老女史が娘達に向かつて、「機恵子さんは一生懸命の人だから、矯風会のようにのろろした会では間に合わない。山室さんと結婚してよかった」と告げた。^{（注3）}

機恵子という伴侶をえた山室の歓喜は想像に難くない。貧苦と戦い、精進一路を生き抜いて来た彼は、はじめて生活上に平衡を味わった。その心は忽ち溢れて「平民之福音」の執筆となる。この書が初版とともに爆発的な売れ行きを示めし、遂に近年五〇〇版をかぞえるに至った事情はここで触れない。しかし長く日本民衆の心の糧とも言われたこの冊子は、結婚間もなく二週間の休暇を利用して、一気呵声に書きあげられたものである。根岸不動の滝の下に借りうけた小室が、執筆の場所であり、これに機恵子の助力があったことは言うまでもない。

(注) 1、山室軍平選集 第八卷

- 2、片山潜と山室との交情は興味深い。彼は明治三十一年当時、神田三崎町にセツツルメント、「キングスレー館」を設立、労働者のための接近をこころみている。神田三崎町には、山室が独立小隊を自給自足のモットーのもとに開所したところであり、はからずも両者はここで深く相識り合っている。両者の軌道は全くその後異ったが。
- 3、選集別巻、追憶集

(11)

日本救世軍の存在が、一躍天下に紹介され、識者の同情を集めるに至ったのは、明治三十三年八月一日を期してはじめられた「廃娼」の戦いの鮮烈さによってである。

この国における廃娼の歴史は、明治五年、政府太政官達の「娼妓芸妓業年期奉公人一切解放令」に遡る。しかし政府のこの措置の背景には、幕末締結の不平等条約改正を急ぐ当事者の苦慮があった

「マリア・ルス号事件」というのがある。神戸女学院所蔵の『The Japan Weekly Mail. (一八七二年七月十二日付)』の記事によれば、明治五年六月四日、暴風雨のため横浜に寄港したペルー国籍船マリア・ルス Maria Luz 号より、清国人の労働移民が前後して脱出し英巡洋艦アイアン・デューク号に泳ぎついたことに始まるこの事件は、英国代理公使ワトソンから外務卿副島種臣に報告され、その報告文には、該船が移民の名を借りた奴隷船である故、国際法上十分の審理ありたしと実情調査の依頼が添えられていた。これに対し、司法郷江藤新平、神奈川県令陸奥宗光とは法理的解釈上と内政的見地からこの審理に反対、副島種臣及び神奈川県参事大江卓とは、我国領海内の出来事故、我が国法に照らして公明の措置をとるべきであると主張、事件は国際法廷にゆだねられている。この審理の過程中、マリア・ルス号側より、日本における奴隷制の存在の事実として芸妓、娼妓の例証が持ち出され、政府は狼敗して大江卓の実情調査による建言を採用、先きの「娼妓解放令」の布告となったものである。マリア・ルス号の清国人苦力は同年十月、清国政府

にひきわたされて事件の落着を見たが、布告された「娼妓解放令」は次第に空文化においこまれていつている。日本近代化政策の外発性を物語る一例であろう。

しかしひとたび「人権」に関する問題としてとり上げられた娼妓解放の布告は、明治八年の崎玉廢娼、つづく岐阜、和歌山の実施と微弱ながら震動をつづける。そしてこれを真に「内発的」な人権問題として担おうとする動きがなかったわけではない。それらの人々の中に明治一と桁の時代の啓蒙思想家、十年代初期の高まりを見せる自由民権の運動家としての田口卯吉、植木枝盛、島田三郎の名を見出す。しかし明治十年代後半の自由民権運動の閉塞期に、もっともこの問題に積極的な取りくみができなかったのは、キリスト教であった。

キリスト教徒湯浅治郎を議長とする群馬県会の廢娼決議（明治二十二年十一月）の背後には「婦人矯風会」の行動方針における廢娼運動の採択や、「我らの姉妹は娼妓なり」と叫んで「真正の人権」の旗をかかげた「女学雑誌」の主張（巖本善治）がある。これらの声は明治二十年代初頭の社会にちょうど遼原の火のようにひろがってゆくのであるが、国権論の抬頭によって不振をかこちはじめるキリスト教の内情に比例して、「驟雨の去るが如く」沈滞に追いこまれていつている。こうした沈滞をやぶり、この問題を全国的規模に高めるために、救世軍の果した鮮血の戦いの意味は大きい。

山室は明治三十三年六月、救世軍本営に勤務となり、幕僚に加わるが、時恰かも「モルフィー事件」がおこっている。これはたまたま、一娼妓の父親が、名古屋の米国宣教師U・G・モルフィーに娘の廢業問題の相談におとずれたことに端を発し、モルフィーは同年三月、弁護士岩崎の助力をえ、民法九十条「公の秩序又は善良の風俗に反する事項を目的とする法律行為は無効とす」の条文に基づいて娼妓の「自由廢業」訴訟を名古屋地方裁判所に提出、一、二審とも敗訴に終る。モルフィーらは之に屈せず問題を大審院にもちこみ、遂に勝訴をかちとった。当時としては画期的判決といわれている。

山室は明治三十三年七月、モルフィーを名古屋市南久屋町の自宅にたずね、司令官ブラド、書記官デュースと共に娼婦運動の具体的展開を協議した。当面の目標は、遊廓への進撃による「自由廃業」の呼びかけ、及び解放娼妓厚生施設「東京婦人ホーム」の開設に置いた。「婦人ホーム」は築地三丁目、本願寺裏門に設けられ、山室機恵子がその責任者となる事が決定されている。

明治三十三年八月一日、「婦人ホーム」落成と同時に、「ときのこえ」(一一二号)は「婦人救済号」を特集、この配布のため東京市内の各小隊は一せいに行動を起こして、品川、新宿、板橋、千住の四宿二廓に向つて進撃した。

(注) 4、「女学雑誌」第九号明治十八年十一月。この文章は、日本人権史上の大文章である、人権、ということとははこの結尾に見える。「諸君の姉妹は娼妓なり、諸君は之を見て、憂うる所なきか。諸君の姉妹は男子の玩弄物となりて公然その恥辱を万国に輝かせり、諸君は尚之を憤らざる平、諸君は夫に婦女改革の念に激せられて真正に人権を愛するの人にあらざる也。」

5、「基督新聞」明治二十五年六月

(三)

救世軍の進撃は、娼妓をかかえる「貸座敷業者」の動揺と憤激を誘った。

八月五日、太尉矢吹幸太郎のひきいた一隊(神田、本郷二小隊連合)は、「血と火」の軍旗を先頭に、太鼓を打ち鳴らしながら、新吉原の大門に至り、病院前交番附近で演説、「ときのこえ」を配布、さらに進んで揚屋町角の「玉宝楼」前に軍旗をたてた時、「貸座敷業者」に雇われた数十名の暴力団が喚声と共に彼らを襲撃、殴打乱撃を加えて矢吹ら数名に負傷させ、再び喚声と共に引き揚げた。当時、社長に島田三郎、論説委員に木下尚江を擁した「毎日新聞」は、当時の状況を詳細に伝えている。

救世軍が「娼妓の廃業する者は、之を助けて正業に就かしめん」との一文を、其の機関誌「ときのこえ」に掲げしは、数日前の事なりき。彼の道義的勇士は更に進んで其の実行に着手し、此の印刷物を吉原に配布しつつ、其の

趣意を演説したり。此の一挙は彼の妓楼主人及び之に附随する醜類を震慄せしめ、遂に暴行を救世軍の人々に加うるに至れり。蓋し此の人々の決心、天下の罪惡に挑戦するに在り。欧米に於ける此の団体の捷利は、既往に顯著なり。区々の暴行決して其の鋭鋒を挫せしむるに足らず。反つて一層の強鋭を加へんこと、吾人の疑わざる所なり。彼の人々は被害の顛末を公衛に陳告せしも、自ら被害の回復を訴えずと聞く。是れ其の犠牲的精神より來れるなり。吾人豈其の志を壯とせざらんや。然れ共、暴行の事実あり、禍害の事実あり、政府は人民保護の転分を尽さざるべからず。吾人は其の事実を搜索して之を詳報し、爾來当局の爲す所如何を觀んと欲す…。

「二六新報」「萬朝報」「新日本」「東京朝日」も競つてこの救世軍人受難を報道、そのために「救世軍」の名は全国にひろまった。こうしたセンセーションの中で本営は焼打ちに備えて警備され、娼妓又はその父母からの救済申し込みが相繼いであらわれた。

自由廢業の戦いは、けれども苦淡にみちた道程だった。ことに島田の「毎日新聞」が痛憤を向けたのは、妓楼側と結託した警察署の「職権乱用」である。所管警察はしばしば「廢業届」に業者側の連署がないことを理由に届を受けつけず、かえつて業者に届け人の氏名を通告して警戒をよびかけるなど、戦いは一時暗礁にのり上げた感もある。

山室ら救世軍を支えたものは、ジャーナリズムの報道によつて高まりを見せはじめた与論であった。これに押された感もあるが内務省は九月一日、各府県知事にあていわゆる「自由廢業承認」の通達を送る。それによると娼妓の廢業届には必ずしも「貸座敷業者」の連署を要せず、又「前借金」は娼妓の自由を拘束しないという内容であった。「奴隸制度」の内実を構築していた「前借金」はこうして崩れた。

九月四日、時の政府を震撼させた次の事件がおこっている。

この日夕刻、山室軍平は、英人少佐デュースと共にかねて救済を依頼されていた娼妓操を救おうとして州崎開明楼に赴く。ところがこれを予期した楼側の暴力団は二人を襲撃、山室とデュースは頭部その他に重傷を受けた。急報により

駆けつけた深川署員四〇名によって救出されたが、この事件の報告を受けた政府の周章はひどかった。

当時の日本政府は、ロシアの南下政策牽制を目的とする日英同盟（締結、一九〇二年（明治三十五年一月））の正式交渉を企図していた。山室はともかく、英人デュースの暴行負傷は日英間の国際問題に進展しかねないし、それによって日本の恥部が公けとなる。時がただけに政府は遂に与論に押された形をとり、同年十月、内務大臣、西郷従道の名によって省令四十四号「娼妓取締規則」の公布となる。一連の布告の「外発性」によって判断すれば、山室らの負傷は、第二の「マリア・ルス号」事件といってよいだろう。この省令により、従来各府県で区々に行なわれていた遊廓の取り締りが統一され、社会衛生上の規定がもうけられた。又娼妓の自由廃業は公認され、楼主、及び三業組合長の連署は不要となったばかりでなく、自由廃業の妨害者は処罰されることになった。又娼妓公許年令が十六才から十八才にひき上げられている。

この措置はもちろん廃娼論に立つ人々を満足させる内容ではない。たとえば木下尚江は「毎日新聞」紙上でこれを批判（十月五日）今度の「取締規則」は究極的に娼妓制度の承認と固定化である。娼妓制度は明らかに奴隷制度であり憲法違反であり、事は今や全く政治問題化したと追撃した。しかし「自由廃業」の戦いにとっては一歩前進の地歩は固められたといつてよい。

山室、デュースの負傷した九月、「自由廃業」をした娼妓の数は、吉原、州崎で六十三名にのぼり、明治三十二年、全国で五万二千二百七十四名を数えた娼妓は、三十四年時には四万九十五人とほぼ一万二千名の減少を遂げている。しかし解放の内実も娼妓更生の手段を欠けば空しいであろう。この点、機恵子の活躍は、娼妓解放史のかげにかくれて見落されていいことでは決してない。

自由廃業娼妓を収容する「婦人ホーム」は機恵子を中心に、津田梅子、島田三郎夫人、海老名弾正夫人らの援助の手をうけて発展した。機恵子はホームの規則を明文化せず、ただ「身軽に働くことは、女の誇なれば、此の家のものは凡

て襷と前掛とを離すべからず。襷は常に左の袂に入れ、前掛は膝にかくべし。」という一事をのみ実行させ、自ら汗して働くことの貴とさと喜悅とを實踐的に体得することを旨とした。ホーム開所当時の状況を、機恵子はこう語っている。

娼妓が厭きに、どうかして廃業したいと思ひ、夜明け前に、二階の格子に帯を結び、それから婦人救済所に引き取られたものもあり、又自由廃業した娼妓にて、自分の身が立たず、或る銘酒屋に奉公した処が、衣類一切を質入れされ、おまけに少しく主人と物言をしたため、刃物をもって追いかけられ、命からがら逃げ出して附近の救世軍に飛び込み、其の手にて私共の方に参つた者もあります……。

概略かくの如き有様で参ります故、参ると直ぐに、それ帯、それ半襟、それ寝衣と心配を致さねばなりません。而して参る者は又……その自由の身となりし事を喜び、この後人間らしい世渡りをしたい故、どうかお針を教えて下さい、台所をさせて下さいと如何にも殊勝げでありますが、一方には亦、救済所では朝寝も昼寝も出来ない故、地獄よりもつらい、とても私にはこの家では勤まらない……などと小首を傾けて居る者も見出すことが出来ます……。そのうちに仕事の樂が分り、文字や算盤が覚えられ、又神の前にその鈍れた良心が目覚ましてくると、自分から非常に嬉しくなつてくるものと見えます。今日まで最もよく勉強しましたもので、四〇日間に羽織位まで、仕立とたち方の出来るようになった者もあり、又すこしばかりお行儀の仕方などを教えますと、それを早く自分の身につけたいため、夜中に目をさまし、起き出てさらつているような者もありました。さきには借金しても、きれいな着物を買ってきた者が、今は如何なる物でも寒暑を凌ぎさえすれば、喜んで古足袋一足でも感謝して受けますから、可愛くて涙のこぼれる様なこともたびたびあります……。(注⁷)

長く封建的隷従をしいられた女性の中でも、親兄弟の犠牲となり、自ら苦界に沈むことを運命と諦視していた娼妓の中には、かえつて人の知ることのできない殊玉のような魂もかくされている。救済された娼妓がたどたどしく文を練り、機恵子のもとに送つた感謝の手紙は、彼女の机上に山積した。

つみふかきわたくしは、すぎたることをかながえますと、さくねんのけふこそわ、かいとり(買取り)にひとしきみのうえであります。のみならず、われさえあさましくおもふ、つみなるみのうえであります。かみさま

は、このわたくしを、あわれみたまいて、しゆくふく(祝福)のよに、おんすくいだしたまわりました。わたくしのみならず、おなじきようぐう(境遇)のきようだいも、おんすくいお(を)うけましたるもの、たくさんあります。このありがたきは、ふでやことばにつくされません。かみさまよ、かたじけなく、かんしゃしたてまつります。なおおねがいもし(申し)あげまするわ、たくさんのきようだいしまい(兄弟姉妹)のみのうえ。つぎにつみふかきわたくしどもにも、たえづかぎりなき、しゆくふくのうちに、すくいみちびきたまえ。わたくしのただいまわ、せんじつにひきかえ、たのしみのあるみのうえとなりました。そのうちに、まいげつの、ときのこえは、かみさまのおんつげお(を)うけるよう、またすくいのためにおはたらきなし下さるる、みなさんのことお(を)うけたまわるので、たえず御はっこうおまつのが、たのしみの一つであります。はやく中校おくさま(筆者注・山室中校夫人機恵子)やきょうだいとお目にかかり、おはなしもし、神さまにおんれいも(申し)しあげる日お(を)まつのが、大なるたのしみでこれお(を)二つとします。はやくりっぱなるひととなりて、父母におめにかかる日お(を)まつのが、たのしみであります。これはちかき一二ので、そのほことか、かぎりありません。ハレルヤ。まずこれまで。みなみな様によく申下されたく候。まづはあらあらかしく。(注) () () (内筆者)

婦人ホーム三年間の統計によると、收容者総数八十七(内、元娼妓五十三、元芸妓七、元酌婦十一、元淫売婦五、その他十一)右のうち(一)親兄弟に渡し、又就職せしめたもの、三十四(二)結婚したもの、二十九、(三)不結果のもの、五、(四)不明、九、(五)現在收容中、一〇、となつてゐる。

民衆はつねに嘘のない実践を愛する。救世軍に対する昔の反感は、今度の勇戦によつて賛嘆と変わった。「巷説、救世軍」という講談が喜ばれ、「救世軍廓之今様」が上演されて民衆の素朴な正義感を誘ひ出した。明治三十年代の流行歌界をリードしたのは「オッペケペー節」の川上音次郎であつたが、「ラッパ節」の添田啞然坊の人気もこれに劣らなかつた。啞然坊の「東雲のストライキ」は、自由廃業の彼にのつて遊廓東雲棲でおこつた娼妓ストライキを歌つたものであり、さりとほつらいねのリフレインにのつて全国津々浦々に歌われていつた。

日本近代ヒューマニズムの系譜にその名をとどめる島田三郎、江原素六、根本正、安藤太郎の四人は、島田の「毎日新聞」紙上に救世軍の戦いの支援を發表

一点の詭謀なく、一毫の表裏なく、唯憐れむべき女奴を救済するの目的をもって、險を履み、難を冒して尽力已まざるは、救世軍娼妓解放の運動なり。其の深く社会の同情を得ること決して偶然に非ず。然るに必要な費用給せざして往々運動に遺憾を感ずるとは、同軍の實際を知る者の語る所、よって我々発起者左の方法をたて、これを江湖の義人に許う。血あり、涙ある有志の士請う一片の助けを同軍に与えよ。(注8)

と訴え、江湖の賛助を求めている。

(注) 6、山室軍平「ブース大將伝」百十頁

7、山室軍平選集 第8巻

8、(救世軍四〇年略史所収)

(四)

日本救世軍の母としての山室機恵子は、又、家庭においては、二男四女の母でもあった。彼女の使命感は、この二重の「母」性の中でも消えつきることがなかった。そのことが彼女の生命をちぢめたといつてもいいであろう。彼女の死は、その戦闘の最中に突然おとずれている。生前の日記はその苛烈な戦いの姿と、家庭の母としての苦惱をにじませて、我々の胸をうつ。その死を早めたものは「結核療養所」設立のための昼夜をわかたぬ奔走にあった。

「結核」という言葉は、このころには遺伝病と考えられた俗信があり、その患者が忌避される風があった。しかも日本の下層社会の貧困は、多数の家族を密居させ、その蔓延を助長し、当時死亡率の中で最高を示めている。

救世軍結核療養所は、こうした弊害と戦うための先駆的事业と見なされ、東京府下中野和田堀に百五十人の收容規模で設立を計画されたものである。英国婦人エミリーの寄金三万円に加え、大隈重信、渋沢栄一、江原素六、阪谷芳郎、

中野武營、島田三郎らが募金計画書に推薦の名を連ねているが、一般の結核への無知のために募金は渉らず、これを憂慮した機恵子は自らの手で五万円の見積り費成就を決意した。大正三年の日記には

四月二〇日、立たんとして頭重く、歩けば直ぐに疲るる身にて、かかる事業にとりかからんとす。無謀の極なり。されど一粒の種子もし地に落ちて死なば、多くの実を結ぶべし。愛する子らと家庭を楽しみ、子らをして嬉々として遊ばしめ度は山々にして、そを思う時、我は妻として価値なきもの、母としての義務を果さぬものとの、苦しき感じ胸間を圧すと雖も、今は進んで為さざる可らざるの時機、涙をのんで最善の道に直進せんとす。たれか日本人に慈善心なしという。彼らをして心を開かしめよ。財布は期せずして開くに至るべし。要は精神界にその人なければなり。神よ願くばその力を満たし、あなたの御用をつとむるものたらしめたまえ。アアメン。

四月二十八日。火曜日。午前中士官会あり。午後津田梅子先生を訪い、募金の決心をのべ、御助力を請う。いつもながらに先生の厚志に感ず。

五月十一日。月曜日。八時前出宅。車にて添田、島田、匹田、丹羽、広井、首藤、石黒、福岡、箕作、新渡戸、鳩山の諸子を訪う。帰宅すれば夜十一時半。

五月十二日。火曜日。早やひるにて十一時出宅。外国語学校に福岡氏、職業学校に鳩山氏を訪れ、九段教会河本夫人、三番町のページ氏等を訪ふ。午后本營に行き、帖簿をしらぶ。夜かえりて直ぐ四児を風呂に入れて後食事。もう一度自分も入りて身体を洗はんとしたりしに、赤子に乳を与えつつ前後も知らずに眠り、顔さえ洗わずにしまえり。

など、はげしい戦いの記録がきざまれている。

機恵子の熱心は実を結びつつあった。「救世軍療養所婦人後援会」が、麴町五番町の津田梅子宅に大正五年九月に生まれた。これが母胎となって募金が進められるが、この企てに参加した婦人の中には、井深花子（井深掘之助夫人）、

鳩山春子（共立女子職業学校教授）、新渡戸マリ子（新渡戸稻造夫人）、本田貞子（本多庸一夫人）、徳富静子（徳富猪一郎夫人）、尾崎エイ子（尾崎行雄夫人）、河井道子（日本基督教女子青年会幹事）、津田梅子（女子英学熟々長）、矢島掛子（日本基督教婦人矯風会会頭）、安井哲子（女子高等師範学校教授）、小崎千代子（小崎弘道夫人）、安藤ふみ子（安藤太郎夫人）、元田悌子（元田作之進夫人）ら二十七名の名が見える。日本婦人運動史の中で、見落すことができないことに思う。その募金趣意書には「：陳者国家多事の折柄、唐突の至に候共、真に棄て置き難き事実の有之、我が同胞諸姉に御許へ申度御座候は、余の儀に無之、近時我国に於ける結核病の蔓延は真に驚くべきものあり。殊に東京市、その他の大都会に於て最も惨状を極め申し候。其の結果は、日下毎年結核病の為に斃るる者の数、実に日露戦争當時に於ける戦死者の総数にも匹敵する由に御座候。然るに他のコレラ、ペストの如き伝染病に対しては、種々救護の施設あるに拘らず、独り結核病に対しては、之が救療の設備を欠き、その貧困なる患者の如きは、一度該病に罹ればも早一死を待つの外に無く、加え逐次伝染して間もなく一家全滅に至る如き悲惨なる実例は、枚挙に遑なきことに御座候。彼らも同胞に候へば唯人道の上より考え候も、是非とも何とかその為に図る所あるべき筈に御座候。：」そして、救世軍への募金依頼を訴えている。この運動を背景に、この年の十一月「療養所」は開設された。しかし機恵子はその開設を見ることができなかった。大正五年七月十日、募金奔走中の彼女は、急性脳膜炎のため倒れた。その臨終の床にかけつけた夫軍平に対して彼女の残したことばには、日本救世軍のもっと光彩ある精神が映っている。それは夫軍平によって次ぎのように伝えられている。

彼女が最早や、死の宣告を受けて居るのかと思えば、私はその寝台の側に座して、今更の様に悔恨の情の胸に迫ることを覚えた。ああ、私は何故、も少しこの真実忠誠なる女性を、大事にいたわらなかつたのであろうか、と。是に於て私は、半醒半睡の状態にある彼女の耳元に囁いて、「あなたは長い間、よく私の為に尽くして呉れたが、私は真に不行届きで、何とも申し訳けがない」というと、其の声が耳に入ったと見え、彼女は忽ちその目を見開い

た。而して極めて静粛に、しかも極めて明瞭に、「否、あなたは私を理解して、よく尽くして下さいに、私は真に不行届きでありました。どうぞ許して下さい」と答えるのであった。そこで私は「併し此は犠牲の生涯だよ、私をして今日あらしめ、又日本の救世軍をして今日あらしめるために、あなたはその犠牲になったのだよ」といふと、「私のようなものに、その犠牲の生涯を送らせて下されたのは、あなたの御導きですから、有難うございます」と応答をした。「それでも十七、八年、一緒に過したねエ」といふと、答えて、「その間一度でも、あなたを疑うた様なことはありません、私は幸福でありました。」

彼女の意識が、かくも明瞭であるのを見て、私はいつそ今の間に、子供らに告別させたが可からうと思つた。折柄篠つく雨の中であつたが、人をして自動車を雇わしめ急ぎ千駄谷の宅に行いて、六人の子らを病院に連れしこらむるように取り計らうたのである。

彼女は何時の間にか、自分の終に起たざることを覺悟して居つたものと見え、それから後、縷々として其の遺言を述べ始めたのである。側に居らるるその母上にむかい「お母さん、私は位や金を求むる生涯を送らなつた故、終迄満足を覺えます。」かくて後私にむかい「此の事を小林のお母さん（弟の義母）にも申し上げて下さい。」（兄上）海軍大佐藤卓藏氏）は、私の自重心を害わないように、私を助けて下された。これは唯、兄妹としてのみならず、知己として厚く感謝する所であります……」

「私が其の初め、救世軍に投じた精神は、武士道を以てキリスト教を受け入れ、之を以て世に尽さんとするにありました。此の事を、民子、武甫等にも伝えて下さい。」かくいうてのち、附添の一人婦人を顧み、「富代さん、こんなに最後まで、夫に親切にして貰う者は幸福だねエ。世間には随分乱暴な夫婦もあるのに。」

午後四時頃、六人の子供らは、自動車にて連れこられた。直ちに之を彼女の寝台の右側に集まらしめた。すると彼女は、おろおろして居る子供らを見て、一人一人その顔をなでつつ、長女民子（十七才）に向いては、「お前は才智は母にも優れて居れど尚信仰が薄い。それ故己の才智を恃まず、神様にお願ひなさい。」長男武甫（十五才）に向ひては、「お前は神の軍隊に属するものだから、小さな事に齟齬せず、大きな心をお有ちなさい。」友子（十才）が私の教えるままに「大きくなつたら、困つた人や悪い人を助けるために尽くします」といふのを聞いて、「友子

は善い児だ、母さんは毎日、お前が学校から帰るのを待つて居た。お前は口ばかりでなく、本当に親切を行うう人になりましょう。周平（八才）に対しては、「周平は善い児になったね。小さい者をいじめるなよ。光子（六才）善子（四才）には「姉さんになって嬉しかろう。」かくて子供ら全体に対しては、「お前方は此の後、お父さんの言う事を、よくお聞きなさい。そうすれば、母さんが今一々言うには及びませぬ」といい、然る後、彼らのために神に祈った。「神様よ、この子供らが、その父と母とを有用幸福に導き給ひしあなたに導かるることを得しめ給え、自己の才智を恃まず、神の力により、世界第一の物なる愛の生活を営むものとならせ給え。キリストによつて願ひまつる。アアメン。」

機恵子ほどその天職を知り、自らその天職に殉じた婦人を、日本の近代史は何人もっているだろうか。彼女の葬儀への会葬者三百五十人、社会各層の人々を網羅し、一婦人の葬儀として「空前」といわれている。彼女の屍は新装の救世軍制服に包まれ、稟然と天に帰ったと言う。

（この項終り）

Résumé

The industrial progress of late nineteenth century Japan had in it a large spot of darkness. The existence of brothels, for an instance, was a part of that darkness. What aroused the movements for social reforms and human rights was basically the Christian concept of man and his dignity and integrity in the sight of God. This was a new idea in the social thought of Japan in the late nineteenth century.

This short article is an attempt to search out the role of women, many of them wives active social reformers, in struggle to establish basic human rights in the darkness of the late Meiji era by putting a spotlight on Kieko Sato, wife of Gunpei Yamamuro, the founder of the Salvation Army in Japan. This attempt is motivated by the feeling the writer has had that not enough recognition has been given to the impact and accomplishment of women behind the scene in much of the social reform movements.

Kieko Sato was born on December 5, 1874, in a farm raising silk worms. Educated under Yoshiharu Iwamoto, a stimulating leader and teacher of then a creative and progressive school for girls in Tokyo, she was exposed to the impact of Christianity and thus came across a young Salvation Army officer, Gunpei Yamamuro. They were married in the Kudanzaka Methodist Church on June 6, 1899.

One of the most difficult campaigns the Salvation Army carried out as a part of its spiritual movement was the anti-brothel movement. It began as a part of the general temperance movement but the grave issue of brothels required an indomitable national character of Gunpei Yamamuro to bring into the public consciousness the seriousness of the deprived human rights of women in brothels.

Kieko was not only the wife of a busy and dynamic social reformer but a mother of six. Her sense of vocation as a part of the Salvation Army overlapped to her family life. The emancipation of women in

brothels meant for her the emancipation of her own children.

It was amidst the campaign for the establishment of a TB sanatorium as a related project to the anti-brothel movement that she came to the end of her relatively short life. At her death bed she thanked her husband for the meaningful life she enjoyed and he thanked her for the life of sacrifice which made the Salvation Army and his life a powerful impact on the life of Japanese society. She gathered her children, giving each child a word of encouragement and assurance of the love of God and prayed, "Our God, guide these children with the same hand which directed their parents to usefulness and happiness. Help them not to search for their own cleverness but to live in the life of Love, the greatest gift from thee through Christ. Amen."

Hers was the life of commitment in the vocation of her husband. She was dressed in a new set of the Salvation Army uniform as her coffin was carried to her funeral, where a large crowd gathered to remember her impact in releasing so many out of the dungeon of inhumanity of the day.